

お天道さま、ありがとう。
日本人のアニミズム(自然崇拜主義)が世界を救う
－ 建築家としての考察 －

川崎市議会議員 吉沢章子

日本人はお天道さまに手を合わせる。山に神が住み、海の神を崇める。道端の石に命を見出し、風に思いを馳せる。あらゆるものに感謝を捧げる。

環境共生という言葉が躍る昨今だが、日本人のように自然との融合を大切にし、それを文化にまで高めあげている民族は稀有だと感じる。



私は、建築家・菊竹清訓先生に師事し、建築設計を生業としてきた。建物を設計するとき、必ず現場に行く。風、光、大地のもつ力、その「場」が持つ気を感じ、エスキースを描く。建物はその場所々で違う。その「場」を活かしきれてこそその建築であると思っている。

学生の時、ヨーロッパ研修に行った。スペインのマドリッドから夜行寝台に揺られバルセロナに着いた。建築家・アントニオ・ガウディの作品が目白押しの街である。

私は日本で彼の作品について、さして勉強もせず、興味もなかった。スライドや写真で見る限り、正直「気持ち悪い」とさえ思っていた。

が、しかし、である。バルセロナの地で、当たり前のように建っているガウディの作品を見て愕然としてしまった。

カタロニア地方の耀くような光、風、気、風土、文化、人、そこに在る全てと見事に融合している。何の違和感もなく、それでいて、その佇まいからは、高い理念が香っていた。私の観念は根底から覆った。

その後、いくつかのガウディ建築を回った。カーサ・ミラという集合住宅の扉は鉄でできている。ワカメのようなスカシの装飾だ。吹き抜けとなっている

中庭からその門を見返すと、朝日が逆光で差込み、ちょうどその前で立ち話をしていたご婦人のシルエットがワカメの模様に溶け込んで、まるでその一部のように見えた。

有機的なもの、無機的なもの、その区別はない。ガウディの掌の中で昇華した物質はそこに存在する全てを包含し、生き生きと存在していた。

私は、「政治家はクリエイターである」と確信して政治家になった。現場で何が起きているのか。その「気」を感じ、クリエイターとしての持つ力を総動員して最善の回答を見出す。それは建築も政治も、他の多くの仕事も同じだと思う。

しかし、一人では為し得ない。建築家は「指揮者」に例えられるが、政治家もしかり。

多くの人に支えられてこそ、である。



NHK大河ドラマのタイトル「天地人」、「天の時」「地の利」「人の輪」が一つになった時、真の力が動くと言われている。それも、調和を旨とする日本人の精神である。

日本の素晴らしさは、その精神そのものである。「お天道さまが見ている」「お天道さまに手を合わせる」、全ての存在に生命を見出し、共に生きることに感謝する。

ガウディもまた、環境に活かされ、環境を活かし続けた。生かされていることに感謝する、ということに目覚めた人類の一人であったのだと思う。そして、それは人類共通の普遍的なものでもある。だからこそ、未だ建築中のサクラダ・ファミリア（聖家族教会）が、彼の死後も引き継がれ、永遠の祈りとして存在し続けているのだろう。

21世紀、私たちは岐路に立っている。他を活かし、他と融合し、感謝の中に生きる「利他的な生き方」を目指すのか？自らを主張し、自らの利益のみを追求し、常に批判と共に生きる「利己的な生き方」を目指すのか？

DNA 解析の権威・筑波大学名誉教授・村上和雄氏はこう述べられている。
「細胞は協力し合い、助け合って存在している。がん細胞は利己的な細胞であるが、他の細胞を食い荒らし、増殖した結果自らも死滅してしまう。」

利他的であることは結果、自らを活かしきる生き方であり、日本人は元来そういう民族である。物質偏重の 20 世紀が終わり、世の中の価値観は変わりつつあり、それは、一人一人の心の中から発せられている。

それこそが大きな潮流である。

革命はヒーローやヒロインが一人で成し得るものではない。
一人一人の心が求め、動き、止めようもないうねりとなった時、必然としてリーダーが現れ、時代は大きく変わってゆく。

今、私たちは岐路に立っている。

「共生」か「自滅」か。

日本人のDNAは「共生」を選び、それが世界をリードしてゆくと私は信じる。

私は私の信念の基に、人と共に生き、地球と共に生きてゆきたい。

政治というフィールドで「共生」を実現するために。